

美作勝山疎開中の谷崎潤一郎

柚木 益子

Masuko Yunoki

はじめに

近代の日本を代表する作家谷崎潤一郎は、永井荷風と並んで日本近代耽美派を代表する作家で、永井荷風と共に晩年には世界的名声を博した。1910年「新思潮」を創刊すると同時に「刺墨」「麒麟」などの単編小説を発表、当時流行の自然主義の平板を破って、豊麗な空想的けんらんの文体をもって女体を賛美し、浪漫的作風で登場以来芸術至上主義を捨てず幻想風、推理小説趣味の作品をうみ、写実味と人情味も加わった母性思慕の特性も現れた作品も発表している。昭和期に入ると、作品の舞台は関西に移り「卍」「蓼喰子虫」「蘆刈」「春琴抄」など一見古典的な、斬新な新手法で、谷崎的諸テーマを日本的陰翳の美学で描いた傑作群を生んでいる。その他「源子物語」の現代語訳、大阪船場の旧家を舞台とした大写真小説「細雪」の稿を起すが、雑誌掲載2回で軍当局の発表禁止にあい、戦火をのがれ疎開先を転々とし最後の土地美作勝山で終戦を迎え翌年夏頃まで居住している。昭和39年東洋人として最初の全米芸術院・米国文学芸術アカデミー名誉会員に推薦されたが、昭和40年7月30日、湯河原の新居で死去した。このような大文豪も戦火に迫われ、食糧に困り、日本で数少ない安全地帯として選んだのが、中国山脈の背梁地津山・勝山であった。私が勝山で谷崎に接したのは、昭和20年7月7日から翌年の夏までの期間で、ちなみに、谷崎潤一郎全集、第16巻、疎開日記中に下記の記録がある。

7月19日・晴

朝七時頃當地国民学校教員野崎益子女史來訪。これは昨夜「細雪」中巻コピー作製のため人を頼むやう女將に依頼し置きたるなり。中巻第三十一回より以下はゲラ刷もコピーもなく予の原稿あるのみ。依て此の原稿を同女史に渡し至急複寫を依頼す。（下略）

当時、小学校を国民学校と呼んでいた。文中の野崎益子は私、柚木益子である。女將とは、谷崎の家主の小野はるをさし、家が近かったのと戦時中で人手不足のため、小野はるより筆写を依頼された。当時はその仕事かどのようなものか考えても見なかったが、「細雪」に対する文壇の評価が高まるにつれて、これは大へんな仕事をさせてもらったものだと気がついた。そこで、当時を思い出しながら「細雪」中巻の筆写の経験者として、美作勝山疎開中の谷崎潤一郎について私見を混じえつつ報告してみたいと思う。

1 勝山への疎開事情

谷崎は戦火に迫られ、熱海、住吉、津山へと疎開し勝山で終戦を迎えている。熱海に疎開したものの、硫黄島、沖縄も占領され、東京も焼かれてしまった。次は房総半島、駿河湾、伊豆

半島に米軍が上陸する噂がしきりに流れて来る。当時、同居していた義妹二人の安全に苦慮し、義妹の縁をたよりに作州津山²²⁾の岩々庵に再疎開することを決めている。「細雪」の連載をやめさせられ経済的にも困っていたという説もある。そこで昭和20年3月3日、知人の岡成志氏³⁾に次のような葉書を出している。

④ 其後御無沙汰致居候処帝都形勢急迫の折柄如何御起居被遊候哉さて突然ながら熱海も大分落着かなく相成候ため再疎開を考慮いたし居その候補地の一つに作州津山を入れ居候小生家内の直ぐ次の妹が旧藩主松平子の弟の所に嫁ぎ居り松平子とも懇意のため家を捜して貰へようかと云うわけに候(まだ話してはありませんが)つきましては同地の人気気候、物資、女学校のあるなし其他御意見お聞かせ被下候はゞ誠に難有、至急御返事得上候。

岡は、3月23日、東京より熱海の谷崎を訪ね、津山の事情を話し、自分も月田(勝山の隣町)に疎開することになっているので、ぜひ津山に疎開せよとすすめた。これが谷崎をして津山への疎開を決意させた動機である。かくして19年9月8日再び住吉の故宅へ帰るが、度々の警報、空襲におびえながらも必死に「細雪」の原稿を書きつづけている。12月に入り状況は一段とひっ迫し、B29の空襲ひきもきらず、^⑤「家族は皆壕に入りたれども、予は「細雪」を執筆す」「今晩空襲あり間もなく解除、執筆の暇なかりしが本日三枚進行」「二枚半進行」^⑥「終日執筆」等まさに爆弾の中をかいくぐっての執筆であった。5月11日にいたり近くの川西航空機工場の空襲に会い、これを機に15日には谷崎等5人津山に逃げ来り、更生車、人力車に分乗して津山市八子にある松平氏邸に入居したが、「池に落つる雨の音佗し」と愛山岩々庵の疎開第一夜を迎えている。かくして17日既に疎開している岡成志の指示を仰がんものと、夫人、他一人の3人で月田を訪問したが、この時既に結核におかされ病臥中の身で、一目見て明日をも知れぬ重態であった。「谷崎さんの来ることを一日千秋の思いで待っていました」とあいさつはしたが重症であることを感じ⁷⁾予は作州に此人以外に知人なく此の人を頼りて疎開せしに此の状態にては如何ともし難し」と悲しみにくれている。かくして岡は、死の前日まで「谷崎さんのお世話が出来なくて申し訳なし」と詫びながら22日死去している。故人の遺志をついだ夫人及従弟の岡山県木材株式会社勝山支所長土井武の努力により6月3日、勝山町新町に貸間ありとの速達便が届けられた。喜んだものの乗車券の制限は殊の他きびしく、やっと二枚を手に入れ、夫婦二人が手廻りの荷物五つ六つもち、炎天下の津山駅についたが「その折の悲しさ云わん方なし」との詞書をそえて次の歌二首を詠んでいる。

8) さすらひの群にまじりて鍋釜を負行く妹をいかにとかせん

9) わらじ賣る店屋の軒に家居する燕におとる身にしやはあらぬ

2 勝山小野はる方へ疎開

六月四日、晴 ようやく二枚の往復切符を入手し午前十時九分発にて勝山に行き岡山県木材株式会社勝山支所長土井武を訪い、土井の案内で同町小野はる方を訪ねている。貸間はその家の離れで二階六畳二間階下八畳二間あり、甚だ気に入りたいれば直ちに約束し部屋代六十五円を手金代りに支払い午後一時七分発の津山行きで帰宅している。

かくして、^⑩七月七日、松子夫人、エミ子の三人が先づ小野はる方へ転居している。津山から

の荷物はすでに到着しており、夕食には女将が心づくしの白米をたいてくれ、胡瓜に金山寺味噌、及びじゃが芋、茄子の味噌汁に落し玉子一個ずつ入ったものを供され、津山より遥かに食糧事情のよいことを喜んでいる。エミ子は勝山町が大いに気に入ったようである。小屋掛け芝居の太鼓の音も聞こえる町を三人で散歩し、河原を歩んで河鹿の音を聞きなどして帰宅就寝している。

谷崎は勝山に荷物を疎開させると、間をおかず、小野はるとじっこの勝山町福谷の須田^⑪武方に嚴重に釘付けされた1㎡の木箱のこも包み大量と、その他は他の二軒に再疎開させている。この大量の木箱は、須田方の25畳の養蚕の空部屋を埋めるのに十分であったという。この荷物丈は谷崎が京都へ引揚げて間もなく持ち帰られたというが、中味は知る由もなかった。小野家の土間につままれていたこの大量の木箱を馬車に積込むにあたり「命にかえて守らねばならぬもの」ということを再度小野君子^⑫に言っていることに注目したい。

さて、昭和42年発行された谷崎松子夫人著^⑬「倚松庵の夢」の一節に^⑭「谷崎源氏」の原稿が疎開先から帰ったことを喜んだ次の文がある。

昭和13年9月で(完結までに)3年の歳月を要したのであるが、原稿の枚数は3391枚と云う膨大な分量となっている。山田孝雄博士の朱筆の加えられたゲラが、行李いっぱい戦火に焼かれないで疎開先から持ち帰られ、今もなお書庫の一隅を領している。中には朱に染まるほど細字が書き込まれたものもあり、これをもっていかに懇切、綿密をきわめたかがわかる。

また、昭和41年、東京、大阪で開かれた^⑮「谷崎潤一郎展」におびたしい時代別の著作、原稿、出版図書全冊、著書全冊、初版本、谷崎文学研究書、発表雑誌、海外出版図書全冊、研究資料文献が展示された。これらは木箱の内容の一部ではなかろうかと想像される。他の二軒には筆子、医薬品、谷崎専用の手造りの原稿用紙の梱包されたもの、米などまでも預けている。

飯住いとはいえ住居も定まり、命にかえて守らねばならぬ荷物を安全な場所へかわし、食糧もまずまず、空襲にもおびやかされず、一応落着いたのか、谷崎はやっと原稿整理に手をつけはじめた。発表はいつになろうとも「細雪」を書きつづけてほしいという川口松太郎の手紙に次のような返事を書き送っている。

^⑯勝山町は津山より西へ汽車にて一時間程の山間にある町に候。女将が中々物分りよく且顔ひろきため何かと便宜不少、熱海ほどには参り難く候へ共、津山に比ぶれば生活条件頗る宜敷、大体に於て満足いたし居候。執筆中の「細雪」中巻原稿を完成いたし、下巻百枚ほど書きかけたままにてここ二、三か月中止いたし居候へ共、御忠告もあり、やがて涼風も相立ち候事故、今月中旬頃より徐々に稿を続けるつもりに御座候。これはあと五百枚程にて全巻完了可被致さりながら中巻下巻を刊行いたし候はいつの時節にやと、ちょっと淋しく存ぜられ候。

この手紙には永井荷風が岡山に来ていたり、勝山に不二洋子が来演することが書かれている。さてここで家主の小野はるについて書いてみたい。明治20年生れ当時54才、戦前は料理屋を経営するかたわら、山森、土地、家屋の売買の仲介を業とし、女ながらも土地の顔役で、打算を度外視したきょう気は町民に深く慕われていた。おかみの人柄を慕って出入りする人達が多く直接、間接に谷崎の生活を豊かにする面が多かった。松子夫人の着物と食糧の交換役や、美食大食漢の谷崎の好物、うなぎ、鮎、どじょう、(特に好物) 柚子、青紫蘇、山芋などと集め

るのに苦心している。京都へ引揚げた後も季節が来れば柚子味噌、柚子風呂、どじょうなべをなつかしみおかみの好意を思いだした手紙がある。谷崎の世話をしてくれる人はこの人より他にないと見込んだ土井武の眼にくるいはなかった。彼女の生活は几帳面で、潔べきで、無類の掃除好きであった。米軍の上陸に備えて行方婦人会の竹槍訓練にも積極的に参加していた。この点、谷崎一族「三姉妹」の関西ブルジョワの優雅で楽しそうな生活が、だらしなく、戦争を忘れた「非国民のよう」に見えたのか、谷崎へは勿論、松子夫人に対しても時として功撃の言葉をあびせていた。¹⁸谷崎は20年の年末に、町内の今田方へ転居している。素朴な小野はるとのつきあいには幾分の当惑と困難があったのであろう。しかし谷崎は引揚げ後も疎開中の恩を忘れず度々書信を寄越し、小野はるをいたわり、孫の清之、君子に対しても親身なアドバイスを忘れず現在も交際が続いている。清之は現在、千葉大大学院教授、君子は豊中市在住中村君子と改姓、実業家夫人として、中国にも出向いている。

さて「細雪」の執筆された二階六畳は、三方ガラス戸に囲まれ、山が近いため雀や、うぐいす、時には鳩までもとびこんで来る部屋であった。執筆、書見は端座して姿勢を崩すことはなかった。この部屋は、松子夫人以外は出入りを許されず、掃除をしてはならない部屋になっていた。「細雪」のモデルの三姉妹の華やいだ階下八畳のふんい気と異り、家族さえ窮い知れぬ孤独な小世界をつくっていた。谷崎はこの「小世界」の中で誰はばかることなく、或意味では異質とさえ思われる「細雪」の世界の原稿を書きためていったのである。

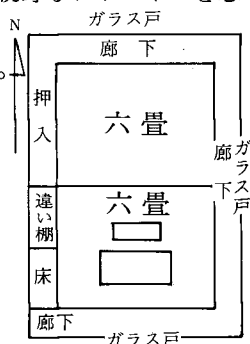


図1 谷崎の書斎

¹⁹ M子は私が書斎で何をしているか、今度はどんな小説を書きつゝあるのか、全く知らないし知ろうともしない。彼女は妹たちを相手に花見の衣裳の相談をしたり、好きな外国作家の翻訳を読むのに夢中になったりしている。私のものが雑誌や新聞に発表されても、先づ第一にそれに飛び着くと云う風でもない。私も亦さう云ふ風にされないことを望んだ

創作はつづけられたが、谷崎は京を離れた疎開の淋しさは一入深く、²⁰「あけくれ京の名所図絵の挿絵を見つ、わずかに憂をなぐさめていた。又二階の書斎に「有人對月數歸期」の七字を柱に懸けたるは、此の句恰も今のわが身にふさわしければなり、あゝわれ齡六十路におよびてかかる邊陲に客とならんとは、げに人の運命ほど測り難きはなし」とも言っている。当時は「細雪」に登場する夫人のM子、次妹のS子、こいさんのN子、松子夫人と前夫根津の長女エミ子が同居し、エミ子の兄の清治は時々姿を見せていた。その他女中のおみきさん夫妻、平松さん、おみきさんの息子の嫁も近くに住い、谷崎はこの大家族集団の生活を支えていかねばならなかった。夫人の長姉が姿を見せぬのは作家の生活振りを嫌ったからだと聞いていた。当時谷崎は60才、夫人は43才で、私は筆写をしながら、しだいにこの小説のモデルは「三姉妹」であろう、それに違いないと思うようになっていた。松子夫人の前夫は、徳川時代に朝鮮貿易を創始したと伝えられ、300年続いた、船場一等の木綿問屋の当主根津清太郎であった。松子夫人の離婚と谷崎の結びつきの経緯は²¹「谷崎家の思い出」「倚松庵の夢」にくわしく述べられている。次にわづか一年間の勝山の疎開であったが、次のような印象記を残している。

²² 勝山町は旭川の上流の山狭にあり、小京都の名がありといふ、まことは京には比すべくもあらねど山近くして保津川に似たる急流の激するけしき嵐峽あたりの面影なきにしもあらざればしか云ふにや、街にも清き小川ひとすじ流れたり、(後略)

早朝五時に起床する谷崎は、町中を流れる用水の傍を通り²³、鳴戸橋、中橋、神橋まで旭川べりを北上し、そのまゝ帰ったり、或時は町中、或時は河原を伝って帰っている。谷崎が日々見る小川は洗濯もするし、菜も洗うし、食器、鍋、釜を洗う便利な川で、水はきれいであった。この小川について興味をもったのか、『都わすれの記』にも未記載の次の歌を一首、友達の家で見つけることができた。

²⁴ あさなゆうな瀬戸の小川にさらこわち洗うもおかし浮世と思へば

夏の散歩時は決まって茶色の²⁵黄平の²⁶半袖を着用し、ステッキ、下駄履であった。早朝の散歩から帰宅した谷崎は、夫人達の眠りをさまさぬよう書斎に入るのが常であった。日中の散歩姿もよく見かけたが、半袖姿で、蘭草のかごをさげ、道路の真中をゆうよう迫らず歩いてた。当時の交通事情から許されたかもしれないが、道路の真中を歩く姿が妙に印象に残っている。それは彼の親しい故六代目尾上菊五郎にも似た美男であったからかもしれない。町民は彼のもつふんい気を畏敬の念をもって見守っていたようである。

3 「細雪」のコピーを頼まれたこと

谷崎の一代の傑作といわれる「細雪」は昭和18年の正月号で中央公論に発表された。2回目の発表は掲載を禁止されたただけであったが、3回目は早くも禁止の憂き目にあっている。このことについて、次の記録がある。

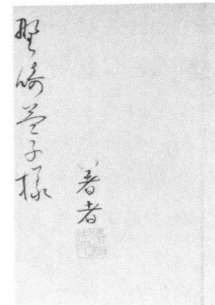
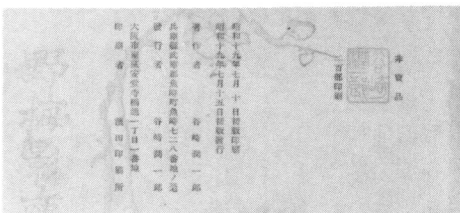
²⁷ 此の小説は日支事変の起る前年即ち昭和11年の秋に始まり、大東亜戦争勃發の年、即ち昭和16年の春、雪子の結婚を以て終る。最初の計画にては、一、二箇月の間隔をおきつゝ引き續き本誌に連載する予定なりしが、その後作者に於て改めて考ふところあり、此の作品が戦時下の讀物にあらざることを感ずるに致りたるを以て、一往掲載を中止し、他日、これが完成發表に差支なき環境の来るべきことを遠き将来に冀ひつゝ、当分續稿を篋底に秘し置かんとなす。讀者諸君も、作者の決意を諒とせらるることを信じて疑わざるもの也。

写真2 上巻細雪奥村（限定自費出版200部の内）

写真1 上巻細雪扉

（限定自費出版本）

陸軍省報道部将校の忌諱に觸れ「時局にそわぬ」ということがその理由であった。文筆家の自由な創作活動が権威によって強制的に封ぜられ一言半



句の抗議もできず、このことを深くあやしみもしないという一般の風潮が強く谷崎を圧迫した。しかし細雪上巻原稿第19章の後書として昭和18年7月上記の声明を発表している。²⁸しかし発表は禁止されたが

あちらこちら逃げ廻りながら稿を續け、昭和17、18、19年は熱海で書き、20年になって熱海も不安になり逃げ歩くようになってからは岡山県の勝山でようやく50枚くらい、興がのつてもらなくても大抵6～7時間きめて書いた」といっている。終戦後、京都南禅寺の塔頭、真乘院に籠居して漸く昭和23年5月脱稿している。が、昭和19年7月「細雪」上巻二百部限定自費出版の運びとなったことを喜び、「これは小生の最大長篇にて、且一番の傑作になるつもりであること、今暫くはあまりぱっと散らさぬよう文壇関係をさけて送るつもりである。」と義妹の

渡辺重子宛の書簡を送っている。続いて12月には中巻の原稿も完成したが疎開にあたりこの原稿を常に身辺において離さなかった。勝山へ疎開後も警報が出ると、小野家の渡廊下に原稿の入ったリュックサックと、ピカピカに磨かれた「はがま」と表二階の疎開者のリュックと計3個が並ぶのが常であった。はがまは空襲になっても「先生を飢えさせてはならない」という小野はるの好意であって、当時はこのような用意をしておかねばならぬ日が続いた。このような状況下で、或日、谷崎からおかみを通して私に「小説の原稿を写してあげてほしい。ついてはもしB29の爆撃にあっても必ず背負って逃げてくれるよう」依頼された。B29の空襲にあっても背負って逃げるものといえば余程大切な物と気になったが、依頼されるまゝ承諾した。

4 谷崎に「細雪」の原稿を受取りにいったこと

昭和20年7月19日の朝、学校へ出勤する前に訪問した。その日の私の服装は、モンペ着用・作業用の鞆をもち、弁当の入ったラシヤの手提げ袋をもち、下駄ばき。この服装が別にはずかしくもない世の中で、戦のさ中を懸命に生きる姿で来意をつけるところ、二階の書齋に案内され、恐る恐る後に続いた。六畳北の間から「誰も入れない部屋」をちらと見たところ、大型の経机に似た机と、硯、それに妙にたくさんの筆がならべてあったのが印象的であった。谷崎は麻の座布団を私にすすめ、自分は、下座に正座して、非常に律儀でいんぎんな態度で、丁寧に書写の依頼の趣を話し、近所に疎開して来たのでよろしくとのことであった。谷崎の丁寧さに恐縮した私は、この仕事をお引受けすることを約束して退出した。一介の国民学校の女教師を上座にすえての依頼は、客嫌いの谷崎にとって、余程のことであったと思う。はっきりいってどぎもをぬかれた出会いであった。

その後、黒田慶次氏（恩師勝山高女校長）にこの話をしたところ、「僕が津山市の学校教育課長時代（昭和20年）に東京在住の津山藩主松平氏から、「津山に谷崎が疎開するからよろしく頼む」との連絡が市長宛に届いた。ついては魚崎まであいさつに行ってくれ」といわれたが「谷崎という不道徳な作家は嫌いだから行きたくない」というのを市長命令だと強引に押しきられ、魚崎に向いたところ、谷崎は玄関まで出迎えに出て、座敷に案内し、下座から「疎開について何分よろしくお願ひしますと、深々と頭をさげた。「戦時下に発表禁止になるような作家と軽べつしていたことを一ぺんに見直した」と話されていた。以後あちこち津山近辺を案内し著書ももらっておられ、その本も見せていただいたことがある。黒田校長の場合といい、私の場合といい、律儀で丁寧な迎え方や、あいさつにこめられた折目正しさに、谷崎の側面を見たような気がした。谷崎の態度にうたれた私は、要望に応じようと、授業中も傍に、寝る時は枕元におき、日夜暇をみつけて書写した。預った原稿は高さにして30cm位であったかと思う。上等な雁皮の原稿用紙で罫は紅殻色、かつて見たこともない特殊な物であることが一目でわかった。ぎっしり詰った毛筆の文字の訂正箇所を毛筆で筆写する仕事であるが、訂正箇所は全く下地の見えぬよう塗りつぶされ、不審な訂正箇所挿入箇所は全くなかった。漢字、仮名いづれも続け字はなかった。一枱一杯の力のこもった文字は誠に印象的であった。書写を完了し翌日もう一度お伺いした。礼を言われた後、次の注意をいただいた。「ご注意申しあげますことは行末に句読点が来た場合は欄外に捨て、おくように」とのことであった。昨夜のうちにチェックされたい。非常に丁寧なことばで不勉強を指摘されたのが今だに忘れられない。句読点一つゆるかせにせぬ態度に恐れをなしたが、谷崎の文章は漢字と平仮名の配置まで美しいようにと計算された文章であることを後年になって知り、驚いたり、うしろめたさにおそわれた。

谷崎は、原稿の清書は勿論、復古の処理にいたる迄厳重を極め、^⑧その日その日に風呂場の炊

き口へ反古かごを持参し、自分自身か時として松子夫人が炊くこともあったが、他人には絶対に任せない仕事であった。かって書き損いの原稿が売立てに出たことがあり、それ以来のことで、^⑭「他界後書齋其の他に原稿の反古紙一片留めなかったその清々しい整理ぶりに今更驚嘆したことである」と松子夫人は述懐している。預かった原稿用紙が、戦時下あまりにも立派なものなので不思議に思っていたところ、「谷崎家の思い出」「倚松庵の夢」^⑮「文房具漫談」から如何に苦心して用意されたか、何故和紙を選んだかを知ることができた。

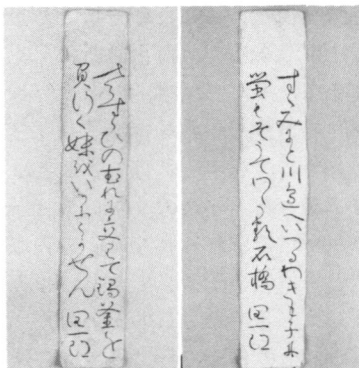
^⑬ 毛筆に使う原稿用紙は四国から取り寄せた和紙で、原稿用紙を自家製造する。黄と青の絵の具を調合して黄緑を造り、それを馬棟で摺り込む。これは一度に一メの四半分程やるので2～3ヶ月に一回のことだが、このまた色合がむつかしい。濡れ絵具で見てもらって一度摺って、日陰で乾かして、またその色を一々尋ねに上る。独断でやったのでは機嫌が悪い。「よし」といわれるまでにはひつこく聞かねばならないので誠に気がねをする。(中略)或時青色が心もち不足かなと思ったが、これくらいならよかろうと二百枚程摺ったところ黄色が勝っていると全部アウトになったことがあった。

^⑭ 「盲目物語」「蘆刈」「春琴抄」等の原稿の文字となると、流石に目にありありと止まってい、原稿紙まで手に触れて見たい衝動さえ覚える。山梔子色のそれも自家製で、家族の誰かが版木に顔料の絵具に液体の糊を混ぜ、和紙をバレンで押えて作るのであるが、相当に熟練を要し、少し滲んでも歪んでもいけないので、弟の終平^⑯らが苦心した話も聞き及んでいる。時に紅殻のいろのこともあった。

私の手にふれた伊予和紙の自家製、紅殻いろの原稿用紙は手元に一枚も残してはいないが、私にとって終生忘れられないものである。つぎに何故和紙を選んだかについては、

^⑮ 深夜一室に籠り、カタリといふ物音もしない中で、静かに想を練り筆を運ぶ私にとってはペン書きの些細な音でも異様に耳につくのである。そして時にはあの響きが随分神経を疲れさせたり、昂ぶらせたりすることがある。然るに毛筆はどんなに急いで書いたにしても絶対に音を立てない。従って心から落ち着き、頭脳が冴え渡るように思う(中略)私は原稿一枚について四、五枚は無駄をする。百枚かくには四、五百枚用意してかかる(中略)山梔の実を煎じて用いたが、昨今は紅殻を用いている。逗留する時は常に版木を鞆の中に入れて行く。

写真3 贈呈された歌二首



原稿用紙一枚粗略に扱わない作家の執念と、彼の耽美精神を見るようで、谷崎を知れば知る程、いんぎんと律儀の奥に秘められた恐ろしい迄の厳しきや独自の美意識を感じずにはいられない。書写が終って小野はるを通して、「お礼がしたいからほしいものがあつたら、何でも言うように」とのことであつた。戦時下食糧も衣料もないいづくしの世の中に、何と豊沃なことばを使う人かな、と一瞬とまどいさえ感じた。おことばに甘えて「谷崎源氏」1冊だけ所望したが、贈られた物は、短冊4枚と「細雪」上巻の自費出版限定本署名入一冊(200部内)と鮫小紋の着物地1反の過分のお礼であつた。(4首の内一首は贈呈後紛失)

- ⑮ みんなみのはるけき海のたゝかひを思いつつ見る十五夜の月
 さすらいの群に交りて鍋釜を負い行く妹をいかにとかせん
- ⑯ すすみにと川辺へいつるわきも子に蛍もそうてわたる石橋
 ⑰ 灯をいましむる夜を小夜ふけて連れは如何にととふ蛍かな

5 おわりに

太平洋戦争という未曾有の大戦争により、予期せずして文豪谷崎潤一郎にめぐり会うことができた。当時、勝山で谷崎の文学者としての価値や、「細雪」について知る人は少なかった。谷崎家の生活は緊迫化した戦争と無縁のような華やいだ、自由な生活で、「非国民のような」と功撃され乍らも、谷崎は柔軟な対応で妥協していた。しかし、芸術家的な信念と文学者としての節操を崩す事なく、ひそかに「細雪」を書きためていた。「三姉妹」を育てた大阪の文化も船場もいつ壊滅するかもしれぬ。それ故に戦中、戦後の荒廃した時代に、関西のブルジョワ育ちの「三姉妹」をモデルに女性美の世界を執ように追求し、書き残そうとしたのではなかろうか。「船場風俗」「細雪」にいささかのかかわりを持ったものの一人としてこの時期の谷崎を評価したい。昭和22年から26年にかけて「細雪」を頂点とする谷崎文学に対し、毎日出版文化賞。朝日文化賞。文化勲賞。39年には全米芸術院・米国文学芸術アカデミー会員證が贈られた。戦火をくぐって書かれた「細雪」の労苦が見事花開いたといえよう。

私が直接、間接に接触した谷崎家の人々は、かつて見たこともない関西の上流人で、船場のブルジョワ文化の片鱗をかいま見ることができた。それらは、日常生活のさりげない動きや、ことばの端々にうかがえて、「ハッ」とすることが多かった。

また谷崎の「生命にかえて守らねばならぬ物」原稿、著作、全集、諸文献、研究資料等の入ったと想像される大量の木箱が戦火に焼かれることなく無事であったことは、谷崎の努力の賜と、深く喜ぶものである。

【注】

- | | |
|---|---|
| 1) 谷崎潤一郎全集16巻 389P | 34) 倚松庵の夢 P187 |
| 5) 360P 6) 374P 7) 379P | 35) 〃 P187 |
| 10) 388P | 15) 谷崎源氏は昭和13年9月、3月の歳月を要して完成、16年7月旧訳を完了 |
| 2) 津山朝日-319号 津山藩松平氏旧邸 | 16) 「文豪谷崎潤一郎展」主催 毎日新聞社
後援 中央公論社 |
| 3) 津山朝日-318号 勝山町月田出身開西中央新聞記者 | 東京日本橋三越41.11.8~20 } 会場と期日
大阪高槻橋三越41.12.3~8 } |
| 4) 津山朝日-318号 17) 津山朝日-320号 | 19) 「祖父谷崎潤一郎」P121 著者渡辺たおり
大興出版社 |
| 18) 疎開日記より (16巻) 99P | 21) 「谷崎家の思い出」S52. 発行
著者 高木はる江 構想社 |
| 20) 瀟溪亭のこと (16巻) 596P | 23) 〃 P31 |
| 22) 都わすれの記 (16巻) 85P 8) } 16巻85P | 23) 勝山町旭川最南端の橋ナルトバシと読む |
| 37) 〃 (16巻) 78P 9) } | 24) 都わすれの記 未掲載 勝山町新町片山信子氏蔵 |
| 38) 〃 84P 39) 未掲載のまま贈呈後紛失 | 25) からむしの織維であり、さらしていないもの、惟子や羽織に用う |
| 11) 須田武氏 勝山町福谷615番地 } 昭和57年 | 26) 半袖は大阪商人の着用するひざまでの丈 袖は半巾の夏用の衣服 倚松庵P122 |
| 12) 浅田綾子氏勝山町福谷165番地 } 11月8日
須田敏男氏勝山町福谷402番地 } 証言を得 | |
| 13) 小野君子氏豊中市緑ヶ丘4~18~18 | |
| 30) 中村君子氏57. 10. 7 証言 (旧姓小野) | |
| 14) 倚松寮の夢42. 7. 中央公論社より発行 | |
| 29) 〃 P102 〃 31) P174 | |
| 33) 「谷崎家の思い出」P31 | |

中国短期大学紀要第14号 (1983)

27) 細雪上卷原稿第19章後	全集23卷	191 P	32) 文房具漫談	全集20卷	463 P
28) 細雪回顧	全集23卷	366 P	36) /	全集20卷	463 P